

# 研究学園都市のあゆみ

昭和 30 年代、日本は戦後復興をはたし、高度経済成長期に入っていました。とりわけ東京は、経済や行政、教育や文化、情報や技術開発など社会の主要な機能が集中し、急激な人口増加をまねきました。そのため住宅難や水不足、通勤地獄や交通渋滞など、人々の生活や仕事にさまざまな支障をきたしていました。

そこで政府は、過密化解消等を目的に首都機能の一部を集団移転することを決め、昭和 38 年(1963 年)9 月 10 日、筑波山麓に研究学園都市を建設し、国の試験研究機関や大学を移転することを閣議了解しました。

昭和 48 年に筑波大学が開学し、さらに各研究機関等の移転がはじまり、国土地理院も昭和 54 年に筑波へ移転しました。

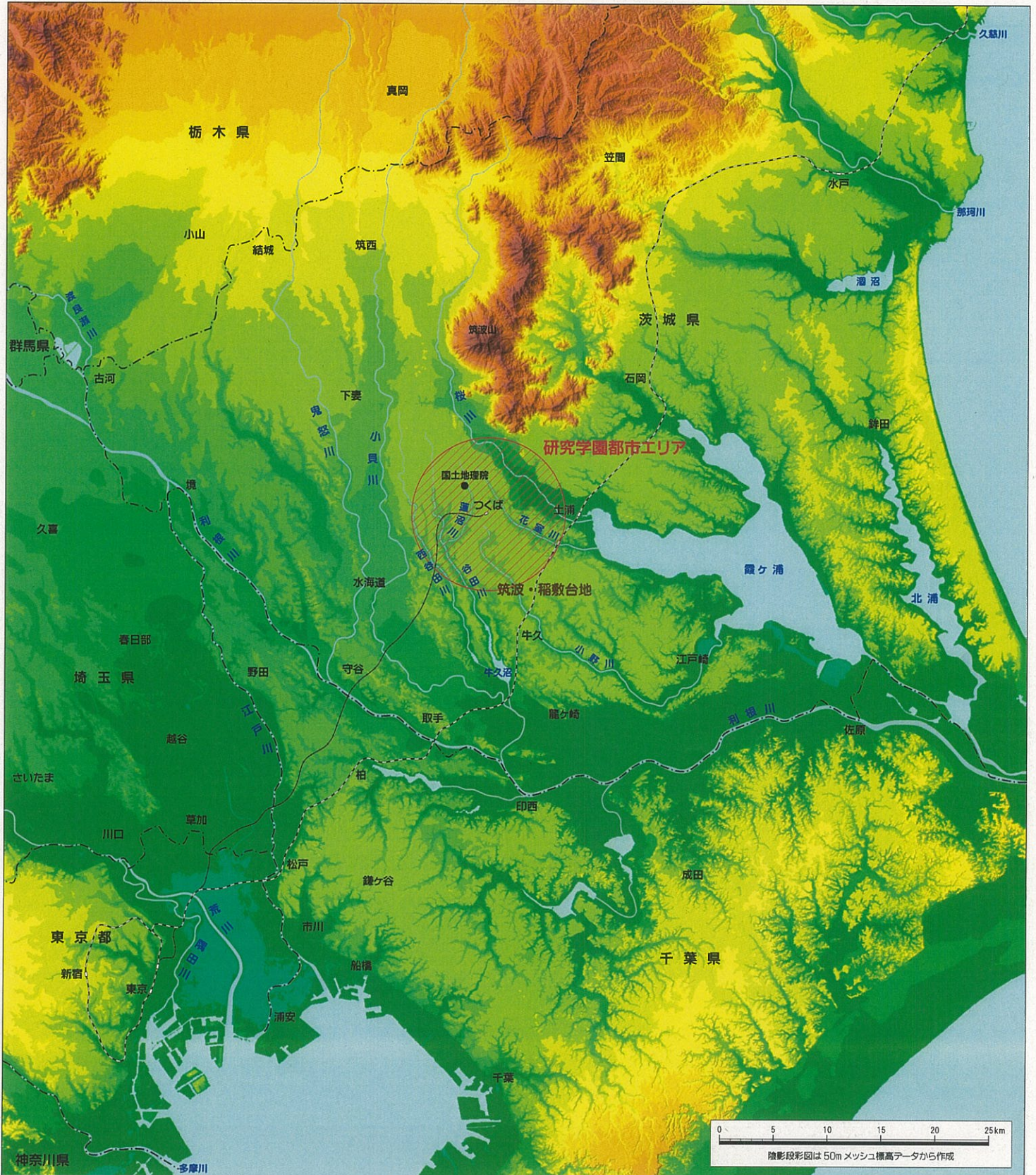
その後、常磐道 柏 IC～谷田部 IC の開通(昭和 56 年)、国際科学技術博覧会(科学万博)の開催(昭和 60 年)、つくば市の誕生(昭和 62 年)、つくばエクスプレス(愛称:TX)の開業(平成 17 年)などとともに、さまざまな企業や大規模商業店舗等の進出があり、研究学園都市は大きく変貌しました。

年	おもなできごと
昭和 38 年(1963)	研究学園都市の筑波建設を閣議了解
昭和 41 年(1966)	筑波研究学園都市の用地買収開始
昭和 45 年(1970)	「筑波研究学園都市建設法」公布
昭和 46 年(1971)	高エネルギー物理学研究所(現高エネルギー加速器研究機構)開設※最初の新設機関
昭和 47 年(1972)	移転機関(新設を含む 43 の試験研究・教育機関)を閣議決定 ※当初は 42 機関、その後 1 機関追加 花室地区公務員宿舎に入居開始 無機材質研究所(現物質・材料研究機構)移転 ※最初の移転機関
昭和 48 年(1973)	筑波大学が開学 路線バス 土浦～花室運行開始 ※学園都市中心部と最寄り駅を結ぶバス路線の開業
昭和 49 年(1974)	竹園東小学校・竹園東中学校が開校 ※この後学園内に小中学校が順次開校
昭和 50 年(1975)	竹園ショッピングセンターがオープン ※学園内初の SC
昭和 51 年(1976)	筑波大学付属病院が開院
昭和 54 年(1979)	国土地理院移転 竹園高校・私立茗溪学園高校が開校 ※この後学園内に高校が順次開校
昭和 55 年(1980)	43 機関の移転完了
昭和 56 年(1981)	常磐自動車道 柏 IC～谷田部 IC 開通 ※常磐道初の開通区間
昭和 57 年(1982)	常磐自動車道 谷田部 IC～千代田石岡 IC 開通
昭和 58 年(1983)	つくばセンタービルがオープン
昭和 60 年(1985)	常磐自動車道と首都高速がつながる ※高速道路で東京と直結 国際科学技術博覧会(科学万博)開催、つくばエキスポセンターがオープン ショッピングセンター「クレオ」がオープン、筑波メディカルセンター病院が開院
昭和 62 年(1987)	筑波鉄道筑波線(土浦～筑波～岩瀬)廃止 高速バス つくばセンター～東京駅間運行開始 谷田部町・豊里町・大穂町・桜村の 4 町村合併でつくば市誕生
昭和 63 年(1988)	つくば市が筑波町を編入合併
平成 2 年(1990)	つくば文化会館「アルス」・市立中央図書館・県立つくば美術館がオープン
平成 6 年(1994)	直通バス つくばセンター～成田空港運行開始
平成 11 年(1999)	国際会議場(エポカルつくば)がオープン 高速バス つくばセンター～羽田空港運行開始
平成 14 年(2002)	つくば市が荃崎町を編入合併
平成 15 年(2003)	首都圏中央連絡自動車道(圏央道) つくば JCT～つくば牛久 IC 開通
平成 17 年(2005)	つくばエクスプレス(TX)開業 日本自動車研究所の施設の一部が東茨城郡城里町に移転 ※研究学園地区周辺開発
平成 20 年(2008)	大型複合ショッピングセンター「イーアスつくば」がオープン
平成 22 年(2010)	つくば市新庁舎開庁 圏央道 つくば中央 IC～つくば JCT 開通
平成 25 年(2013)	大型複合ショッピングセンター「イオンモールつくば」がオープン

# 研究学園都市のあるところ

筑波研究学園都市は、筑波山の南側にひろがる「筑波・稲敷台地」と呼ばれる標高 20～30 メートルの台地の上に建設されました。台地の東側には霞ヶ浦に注ぐ桜川、西側には利根川の支流である小貝川が流れ、二つの川にはさまれたほぼ平坦な台地の上を花室川・小野川・蓮沼川・谷田川などの小河川が南に流れています。

学園都市のあるつくば市は茨城県の南西部に位置し、茨城県の県庁所在地水戸市から南西に約 50 キロメートル、東京都心から北東へ約 50 キロメートルの距離に位置しています。面積は 284.07 平方キロメートルで、県内4番目の広さです。



# つくば市ができるまで

「昭和の大合併」で、いまのつくば市のもととなる筑波町、谷田部町、豊里町、大穂町、桜村が誕生しました。

昭和 30 年 (1955 年)  
田水山村、筑波町、田井村、北条町、小田村が合併し筑波町となる  
昭和 31 年 (1956 年)  
筑波町が作岡村を編入する  
昭和 32 年 (1957 年)  
筑波町が菅間村を編入する

昭和 30 年 (1955 年)  
大穂町と旭村の一部が合併し大穂町となる  
昭和 31 年 (1956 年)  
大穂町が吉沼村の一部を編入する

昭和 30 年 (1955 年)  
上郷町と旭村の一部が合併し豊里町となる  
昭和 31 年 (1956 年)  
豊里町が吉沼村の一部を編入する  
昭和 36 年 (1961 年)  
豊里町が谷田部町の一部を編入する

昭和 30 年 (1955 年)  
谷田部町、小野川村、葛城村、島名村、真瀬村の一部が合併し谷田部町となる

研究学園都市の建設にともない、谷田部町など関係する 6 町村が合併して、つくば市となっています。

昭和 62 年 (1987 年)  
谷田部町、豊里町、大穂町、桜村が合併しつくば市誕生

昭和 63 年 (1988 年)  
筑波町を編入合併

平成 14 年 (2002 年)  
茎崎町を編入合併

昭和 30 年 (1955 年)  
栄村、九重村、栗原村が合併し桜村となる

昭和 58 年 (1983 年)  
茎崎町が町制施行  
※茎崎町は「明治の大合併 (明治 22 年)」で茎崎村が誕生して以来、つくば市に編入されるまでずっと単独のまま

現在のつくば市の市域  
 つくば市誕生前の 6 町村の境界  




 「昭和の大合併」前の旧町村の範囲

基図は、50000 分 1 地形図  
 水海道 (平成 7 年修正)  
 真壁、小山 (平成 8 年修正)  
 土浦、龍ヶ崎、野田 (平成 17 年要部修正)

「つくば市誕生前の 6 町村」の境界は、  
 50000 分 1 地形図 土浦 (昭和 58 年修正)、  
 龍ヶ崎 (昭和 58 年編集) による

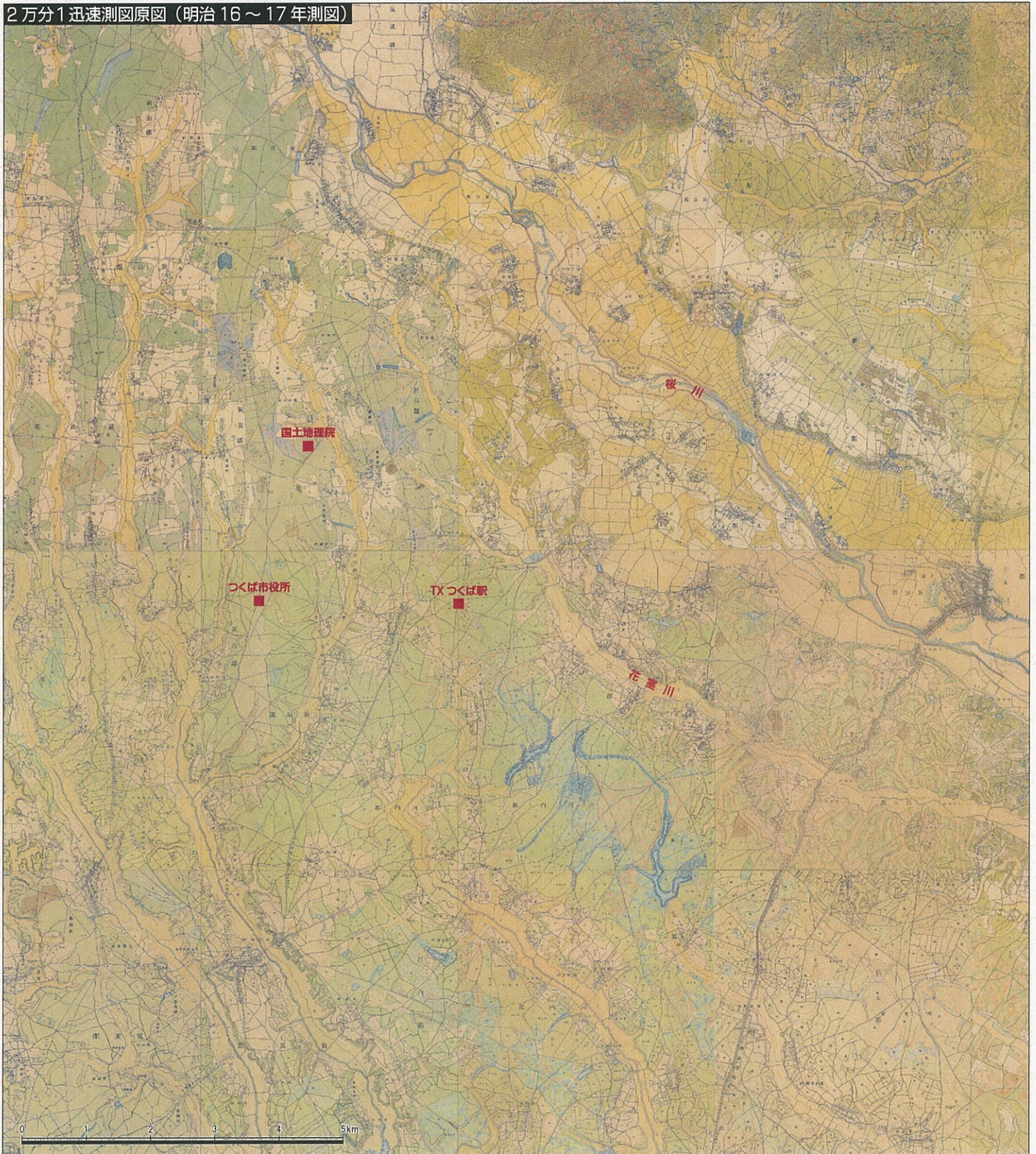
「昭和の大合併」前の旧町村の範囲は、  
 昭和 26 年～28 年応急修正の各 50000 分 1 地形図による

0 1 2 3 4 5 km

【明治、昭和、平成の市町村大合併】  
 明治維新以後のわが国では、近代的地方行政を効率的に処理していくために、「市制町村制施行法 (明治 21 年 / 1888 年)」、「町村合併促進法 (昭和 26 年 / 1953 年)」、「市町村合併特例法 (平成 16 年 / 2004 年)」にもとづいて、明治 20 年代・昭和 30 年代・平成 10 年代後半にそれぞれ大規模な市町村合併が行われました。  
 その結果、明治 21 年に 71,314 もあった町村が、現在は 1,719 市町村 (平成 25 年 1 月現在、総務省統計) にまで減少しています。

# 筑波の原風景

2 万分 1 迅速測図原図 (明治 16 ~ 17 年測図)



研究学園都市の原風景ともいえる、いまからおおよそ 130 年前の筑波の姿です。学園都市が建設される前の筑波は、アカマツの平地林が広がる台地でしたが、明治時代中ごろに作成された「迅速測図原図」をよく見ると、特に現在国土地理院があるあたりから学園都市中心部にかけて、緑色に着色された樹林の区画の中に「栲(クヌギ)」という文字が多く見られます。これは、この当時、この地域に広大な雑木林が広がっていたことを示しています。一方、桜川に近い台地の東側の地域には、雑木林に混じって「松」が目立ちます。花室川などの小河川に沿った低地には水田が作られ、その周辺に集落が点在しています。集落のまわりの林は少しずつ開墾されて畑に利用されています。「松」の多くは植栽されたものです。

# 明治の面影残る筑波周辺

谷田部上空から筑波山方向

1946年 米軍撮影

